

2 日生の地名考 『むかしは「星村」といわれていた。ところがその時分、何度も大火事があったので、これでは困るということになり、星の文字を二つに分けて、日生にしたのである」という人がある。大火事がたびたび起ったことはあったかも知れんが、何故に星を二つに分けたら、火事を少くする「まじない」になるのか。

日生が「星」村といった時分には、春日神社が奥ノ川の深山みやまの下にあって、日生神社というていた。もし日生が「星」村といわれていたら、その神社も日生神社でなくて、「星」神社でなくてはならない。ところがわれわれは不幸にして、「星」神社というもののあったことを聞いていない。地名と神社名とは相互に密接な関係があるから、同じ地名を採るなら日生神社でなくて「星」神社であるはずである。ところが星神社があったといわいで、日生神社があったというのである。ここに作りごとがあり、矛盾があるのである。かかる愚説は信ずる必要はない。間違いやすいから子孫へ残すべきものではない。』牧野大誓は「大日生町の研究」の中で、「星」村の縁起説をこのように否定しているが、日生の地名がいつごろから、もちいられたかは明らかでない。

日生の読み方については、いまは「ヒナセ」と発音しているが、むかしは「ヒナシ」といつていた。いまでも年寄連中は「ヒナシ」と発音する者が多い。日生の日はお日様の日、生は生なす、生む、出産する意」と読むところから、日と生をつづけて「ヒナシ」と発音し、語尾が変化して「シ」が「セ」になったという説もある。高良八幡宮の金幣けいには「火無村」と書かれているが、どうしてこの文字が使われたかわかっていない。

広島通信局から日生町に対し、昭和八年四月十八日付で、つぎのような照会文書がきている。

『貴町では「ヒナシ」「ヒナセ」のいずれが一般的に呼称されているのか。事業上必要なので回報せられたい。』これに対し日生町からは

『本町古来の慣行によれば「ヒナシ」が正当と思われるが、現在一般的には「ヒナセ」と呼称する者が多数あるやに見受けられる』と回答し、その根拠は明らかにされていない。

「大日生町の研究」にはつぎのように論じている。

日生は「日の生まれる里」の意味がある。むかしは深山みやまの一本松、すなわち元水道の貯水地のあるところあの細道が、奥へ通ずるただ一つの道であったという。奥の方から蕃山へ出て来た人が、この道を通して日生へ来ていたのである。

むかしの人が、この道を通して、海岸へ出ようとする折、深山の上や三石の白石山の上あたりから東方はるか彼方の海から、昇る朝日を見たのではあるまいか。

そして、その偉大さ、美しさに驚嘆し、

「おお、日はあそから生まれる。あそここそ、日の生まれるところだッー。」とさげんだのではあるまいだろうか。

この絶叫、讚嘆、驚異、それが名前となったのではあるまいだろうか。

日生の人よ、日生の地名に誇りを感じよ。そして日が生まれる如き宇宙真理の驚異と、不思議さと、新鮮さに酔え。御身たちは、宇宙真理の中に住む昇天の力を持っている。新鮮潑刺たる力を抱いているのである。

日本が「日の本」の国と称しているのと同列の立派な目出度い、偉大な名前である。日本の国名に誇りを感じることく、日生の町名に誇り持たれよ。(原文のまま)